

中口家の墓がある千葉県勝浦市の真光寺

中口佐市の眠る真光寺

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

紀伊・房総

くろしお物語

◇10◇

千葉・勝浦で「最後の紀州漁民」と言われている中口佐市の出身地、和歌山市雑賀崎を訪ねた。和歌浦湾の西



方に突出した岬に位置して生計を立てている。豊かな村ではなかった。急勾配の斜面に密集した、こじんまりと整頓された集落で、エキンチックな雰囲気を感じ出している。眺望がイタリアの世界遺産・アマルフィ海岸に似ているとされ、「日本のアマルフィ」と言われているという。

しかし、和歌山市に編入される前の旧雑賀崎村を呼び寄せ、タイ釣

の名人として82歳の生涯を閉じた。私は2000人ほどで、漁業組合員数は280人、漁船は340隻、漁業従事者は700人。まさに小さな漁村である。1887(明治20)年ごろからタイ釣りの出稼ぎが定着し、女子は畑仕事、真田紐編みや織布の手内職を

活躍しのび墓に供花

賀崎村の組合調査によると、1917(大正6)年の人口は3000人ほどで、漁業組合員数は280人、漁船は340隻、漁業従事者は700人。まさに小さな漁村である。1887(明治20)年ごろからタイ釣りの出稼ぎが定着し、女子は畑仕事、真田紐編みや織布の手内職を

墓があった。手入れが行き届いた墓地になっており、佐市の活躍ぶりを話すと、和子さんが境内の菊を2本切ってくれた。中口一家の活躍をしのびつつ、墓に供花した。通された

の横穴が小庵として残っており、「紀州魂」を見た思いがした。境内の墓地で苔むした墓石の中から家名、人名の分かる墓前に立ってみた。紀州加太などの地名が読み取れた。江戸時代初期から幕末までの紀州漁民の方々だった。現檀家の墓を案内してもらうと、その中に中口家の